

玄冬の AACK : 京都大学の過去 100 年間の登山活動

松沢哲郎

京都大学霊長類研究所

京都大学の登山活動は、2015年でちょうど100年を迎えた。その登山活動を4つの時期に分けて概説する。登山を通じて、どのようなパイオニアワークがなされたのか。その際に、どのような犠牲が払われたのか。事実即した検証を試みた。登山活動の推移を人間の一生にたとえると、青春、朱夏、白秋、玄冬にたとえられるだろう。京都大学の登山活動は玄冬の時期を迎えたといえるだろう。その歴史を担ってきた京都大学学士山岳会（AACK）の今後の課題を3つにまとめた。①過去の事業のアーカイブ化と公開、②現在に付託されている活動継続と京大山岳部という現役への支援、③将来への展望としての新しい学術の展開である。その将来を担うものが、2013年に始まった京都大学リーディング大学院「霊長類学・ワイルドライフサイエンス」だといえる。

前書き

2015年5月24日をもって京都大学学士山岳会 AACK の第14代会長になった。その就任の挨拶としてニューズレターに一文を寄稿した。それを編集長の許可を得て「ヒマラヤ学誌」に採録する。

採録にあたって、遭難者の氏名と当時の年齢を明記した。若くして亡くなった人々を正確に記憶にとどめたいと思ったからである。それぞれの遭難については追悼集や報告があり、本来は引用文献として個々を掲げるべきものであるが、諸般の事情で割愛させていただく。

著者の本業である霊長類学の研究とその歴史については、その濫觴と60年間の歩みを別途の論文で紹介した（松沢，2009；伊谷ほか，2008）。登山と霊長類学は、今西錦司（1902-1992）をひとつの契機とする精神の双子だといえる。

研究と登山は共通点がある。パイオニアワークすなわち「初登頂の精神」と訳すものだ。まだ、だれも見えていないものを見る。まだだれも考えていないことを考える。それは、まだだれも登ったことのない頂に到達することに似ている。

京大山岳部では、パイオニアワークをするために必要なものとして、オールラウンド&コンプリートという標語があった。もちろん、なんでも完璧にできるということはいえない。そのためには「ステップ・バイ・ステップ」、すなわち毎日一歩ずつという努力のしかたがあると思う。「サ

イド・バイ・サイド」、すなわち互いに助け合っという努力のしかたもあるだろう。そうした努力が実際にあった。そして、物事がうまくいくこともあったが、暗転することもあった。登山活動という側面から、京都大学のフィールドワークの足跡をたどる。なお、就任挨拶という文章の性格から「です・ます」調で記されたものをそのままとする。

京大山岳部に入る

本年は、1865年7月14日にエドワード・ウィンパーらがマッターホルンに登頂して150年になります。京都大学の歴史を紐解くと、1915年に学生が教員に引率されて北アルプス登山に行き山岳部を結成した、という記載があります。したがって今年は、京大の山登りが始まってちょうど100年の節目の年です。

私事を申し上げて恐縮ですが、1969年（昭和44年）に京都大学に入学しました。学生紛争で東大入試の無かった年です。都立両国高校（3中）の出身ですが、ほかにも日比谷（1中）、立川（2中）、戸山（4中）、西（11中）など、東京府立中学の伝統をひく、当時の受験校である都立のナンバースクールの出身者がそろっていました。

京大山岳部の入部者には2通りのパターンがありました。同回生で山岳部リーダーを務めることになる高木真一は戸山高校の出身です。高校時代

から山岳部で山登りをし、京大山岳部に入りたくて京大に来ました。たとえ東大の受験があっても必ず京大に来たはずです。根っからの京大山岳部志向です。わたくしは、高校でこそ山岳部でしたが、京大に行きたいと思ったことは一度もありませんでした。何が何でも東大というわけではなく、それが家から通える最も近い国立大学だったからです。授業料が年間1万2千円の時代です。手取り早く親孝行するには公立の学校に行き、最寄りの国立大学に行くのがよい。縁あって京都に来たのですが、大学が封鎖されて行くところが無かった。「しかたがない、京大にも山岳部くらいあるだろう」と思って部室（ルーム）を訪ねました。

今西錦司、桑原武夫、西堀栄三郎らの先輩方とお目にかかって直接に言葉を交わすことのできた最後の世代です。誕生がちょうど半世紀ほど離れています。京大に関心は無く、京大の山登りの伝統にも無知でしたから、こうした方々のお名前は当時まったく存じ上げませんでした。「学部はどちらですか」「山岳部です」というような暮らしが始まるのですが、いちおう文学部の哲学科で哲学を志望しました。せっかく京都に行くのだから、高校の授業で習った「西田哲学でも学ぶのが良いだろう」という18歳の少年の単純な発想です。ちなみに、高校時代はひたすら受験勉強に勤しんでいたのも、哲学書などは一冊も読んだことがありません。

ヒマラヤ登山と遭難

「遭難から4年目の2回生」というめぐり合わせです。1967年春の日高ベテガリの高山さんの遭難、さらに4年前の穂高滝谷の加納さんの遭難は、いずれも2回生のときでした。二度あることは三度ある。自分たちは遭難から4年目を迎えて2回生になることを常に意識しつつ、すっかり山に夢中になっていました。11月の滝谷を下から遡行、11月のジャンダルム飛騨尾根、3月の魚沼三山縦走、夏の黒部川半月沢初遡行、そうした延長に1973年のヤルンカンがあります。当時22歳、留年を決めて参加しました。

松田・上田のヤルンカン初登頂と直後の松田さんの遭難のあと、高木と2人でカラコルムのシスパーレ峰を試登して日本に戻りました。帰国と同

時に受け取ったのが8月の北俣での粟屋君の遭難の報でした。そして山岳部が山行を再開したばかりの11月に槍ヶ岳の中ノ沢の雪崩遭難がありました。5名が亡くなりました。その隊の最上級生でしたから、実質的な責任があります。テント地が雪崩にあったわけですから、設営場所の判断を誤ったことは自明です。自らの過ちで多くの岳友を死なせてしまいました。そのとき、高木と帰国後2人で立案した翌1974年カラコルム遠征の申請がちょうど提出されていました。K12の許可が下り、高木は行く決意をし、伊藤君と2人で初登頂して還ってきませんでした。

1973年5月のヤルンカンから翌年9月のK12まで、二つの初登頂と4つの遭難がありました。その間の1974年5月に、ヤルンカン隊員の富田さんと浅野さんが奥美濃の山道で自動車が転落して亡くなりました。わずか1年4ヶ月ほどのあいだに11人の山の友人を立て続けに失ったことになります。多くが20歳代で、最年少の佐伯秀夫くんは18歳です。

以下に、京大山岳部・京大士山岳会の遭難をまとめます。京都の金毘羅山の赤岩での転落事故、鹿島槍ヶ岳の転落事故のあと、わたしたちの世代が身近に経験した遭難を、年代順に並べました。

- 1962年、穂高岳滝谷のトラバース中の滑落、加納洋（20）
- 1967年、日高のベテガリ岳の雪庇踏み抜き、高山晴彦（20）
- 1973年、ヤルンカンの転落、松田隆雄（31）
- 1973年、北又谷の転落、粟屋文雄（19）
- 1973年、槍ヶ岳中ノ沢の雪崩埋没、成田幸裕（21）、太田勝啓（21）、佐伯邦夫（21）、道倉洋一郎（20）、佐伯秀夫（18）
- 1974年、K12の転落、高木真一（25）、伊藤勤（24）
- 1982年、劔赤谷尾根の雪庇踏み抜き転落、竹村義文（26）、伊藤健一郎（23）
- 2014年、岩井沢の渡渉事故、笹瀬頌晋（21）、早川鵬図（20）

さらにこれに、1991年1月の雲南省の梅里雪山（メイリシユエシヤン）のカワカブ峰で17名全員が雪崩に埋没するという遭難がありました。

AACKの青春・朱夏・白秋・玄冬

わたくしの京大山岳部時代を振り返ると同様に、京大学士山岳会の歴史を自分なりの視点で振り返ってみたいと思います。1931年5月24日に、ヒマラヤ登山をめざす団体として結成されました。今年で創立84年目を迎えます。中国の先哲は人間の一生を四季になぞらえて四期に分けました。青春、朱夏、白秋、玄冬です。京大学士山岳会の歩みを約20年ごとに刻んで振り返ってみます。

京大学士山岳会という法人の青春は、1931年の創立からの約20年間ではないでしょうか。1938年の白頭山遠征、大興安嶺、カブルーへの遠征も計画されました。着実に歩み始めた時期ですが戦争で中断を余儀なくされました。

1952年にAACKが再建され朱夏といえる次の約20年間が始まります。嚆矢は最初のヒマラヤ遠征でしょう。1952年に、日本山岳会へ計画委譲したのですが、今西らのマナスル試登がありました。京大学士山岳会が主催ないし関与した登山・探検としては、1953年アンナプルナ、1955年のカラコルム探検、1958年チョゴリザ、1960年ノシャック、1962年のサルトロカンリ、同じ1962年のインドラサン(京大山岳部)、1964年のアンナプルナ南峰(ガネッシュ、京大山岳部)の初登頂に続きます。その延長として1967年に未踏のヤルンカン8505mを樋口・松田が試登しました。つまり7000m峰の初登頂の先に、8500m峰の初登頂という高い目標を掲げました。登りつめたという感があります。

白秋の始まりは、1973年のヤルンカンと1974年のK12でしょう。どちらも初登頂とは言いながら、登頂後の遭難に続く苦い結末です。それは同時に京大山岳部の1973年の北俣と槍の連続した二つの遭難以降の時代ともいえます。物事が暗転した。そこから始まる時代です。小規模の遠征隊がいくつか出ましたが、一方で京大山岳部の剣岳赤谷尾根の遭難もありました。やがて、1982年カンベンチン、1985年ナムナニ(同志社と中国との合同)、1985年マサコン(京大山岳部)、1988年コンロン山脈6903m峰の初登頂、さらに1989年ムズターグアタと1990年シシャバンマという既登峰の登頂成功がありました。しかし1991年1月雲南省のメイリシュエシヤン(カワカブ)

の雪崩遭難で、日中合同隊17名が亡くなりました。暗転して始まった時代の最後に、再度の暗転となりました。

白秋が終わって玄冬を迎えます。時期で言えば1991年のメイリの遭難以降の時期です。

1996年のメイリへの再度の試みはありましたが登頂はなりません。1998年7月には明永氷河上に遺体・遺品が現れました。遺体捜索・遺品回収は今に続きます。来年早々、メイリシュエシヤンの遭難から25年目を迎えます。この四半世紀、京大学士山岳会としては目だった登山活動は何もしていません。ヒマラヤの初登頂をめざすという意味では、会の使命は果たしたともいえるでしょう。

京大学士山岳会の青春を担ってきた今西・桑原・西堀らの人々は全員がすでに退場しました。会の朱夏を担った当時若手の登山家が今では全員80歳台です。この方々がぼろりぼろりと櫛の歯が抜けるように去っていくでしょう。かくいうわたくしも、前会長の松林さんと同様に1950年生まれです。還暦を過ぎ定年退職を迎えようとしています。つまり会の白秋の登場人物も、徐々に後景に引いていきます。今に続く玄冬の時代も四半世紀を越えました。以上が、経緯を追ったうえで法人の現状認識です。

AACKの活動の3つの展望

京大学士山岳会の命脈はもはや尽きていて、解散する、あるいは立ち枯れば良いのでしょうか。そうではないと思います。松林前会長のもと、理事・特任副会長という新設の職責をいただいて、京大学士山岳会の将来を考えてきました。このたび会長職を引き受けるにあたり、京大学士山岳会の役割が3つあると考えています。過去と、現在と、将来にかかわる課題です。

第1は、アーカイブの整備です。京大学士山岳会の登山のユニークな特徴は、つねに学術に関わる活動をしてきたことと、その記録を報告書や映像記録として遺してきたことではないでしょうか。先人の遺した膨大な記録があります。まず手始めに、ホームページの整備に着手しました。ぜひ一度クリックしてみてください。

<http://www.aack.info/>

冒頭に英語のサイトが現れるようにしてありま

す。日本語を見るにはクリックが必要です。国際的な発信をめざしているからです。AACKを旗揚げしたとき今西さんは29歳でした。彼らの世代に始まって多くの人がバトンを引き継ぐようにして遺してきた「バイオニアワークの足跡」が京大にあります。参加者の多くが20歳代ないし30歳代に成し遂げた、他に類例のないバイオニアワークです。それを後世に、かつ世界に向けて発信していきたい。映像等を駆使して、過去を現代にゆみがえらせます。それは、じつはかけがえの無い、科学的にもすばらしい試みになるでしょう。たとえば50年という時間をおいて比較することでヒマラヤの氷河の消長を検証できます。ブータンの文化の変容を、60年前—30年前—今、というように辿ることが可能です。新しい、だれもまだ手を付けていない学問の領域が、過去をアーカイブすることから構想できるのではないのでしょうか。

第2は、現在与えられている責務をまっとうすることです。京大山岳部は、残念ながら昨年9月に2人の部員を岩井沢の遭難で失くしました。京大士山岳会には山岳部の卒業生が多数います。山岳部こそが母体となって人材を輩出し、京大士山岳会の活動を支えてきました。そうした現役山岳部の登山をOBが支援し、必要な手を差し伸べるべきでしょう。つねに一歩下がった位置から、現役の登山活動を助言し支援する役割があると思います。かつて京大は「探検大学」と呼ばれ、とりわけ京大士山岳会はその登山・探検のフラグシップ（旗艦）としての役割を果たしてきました。その期待は今も変わりません。京都大学に最も永く残る84年の歴史をもつ山岳団体として、人々の付託に応える必要があるでしょう。「時報」や「ニューズレター」の刊行を通じて活動を発信します。そうして存続することで、過去から引き継がれた物の受け皿となることができます。メイリシュエシヤンの遺品はまだ氷河にいくばくか残っています。過去の遠征隊の記録、過去におこした物事の責任を、法人としての覚悟をもって受け継いでいく必要があるのではないのでしょうか。

第3は、将来へ向けた継続するちからです。これまで連続とした人々の努力があったからこそ今日があります。「京都大学ブータン友好プログラム」という事業を松林さんと2人で2010年10月から実施してきました。この4年間で150名を超

える京大の教職員学生をブータンに送り込んできました。今年9月には京大山岳部の現役5名とOBがブータンのトレッキングに行こうとしています（注：約1か月のトレッキングを終えて無事に帰着しました）。こういう活動を京大士山岳会の旗のもとに取り込んで、次の世代の人材育成をすべきでしょう。成果は、「ヒマラヤ学誌」（松林編集長）というかたちで世に問い、だれでもいつでも無料でPDFをダウンロードできるオープンアクセス化を果たしています。ホームページをぜひ見てください。

<http://www.kyoto-bhutan.org/>

大学院生の育成プログラムとしては、京都大学リーディング大学院「霊長類学・ワイルドライフサイエンス」という事業を、京大山岳部長の幸島さんらと2013年10月から始めています。フィールドワークを基礎にした人材を育成するプログラムです。8つの実習のうち2つはフィールドワークの基礎を学ぶためのもので、笹ヶ峰ヒュッテの無雪期と積雪期の実習です。京大士山岳会としてそうした人材育成に関わる未来を考えています。ホームページをぜひ見てください。

<http://www.wildlife-science.org/>

京都大学総長は山極壽一さんです。学生時代はスキー部に在籍していました。山が好きで、サルが好きで、東京の国立高校の出身ですが京都大学に来た、というパターンです。京大士山岳会の名誉会員になっていただくようお願いしたところ快諾をいただきました。来年の総会で正式に承認いただく手配です。これまでもヒマラヤ遠征のたびに京大総長が名誉会員になってきましたが、岡本道雄総長を最後に絶えて久しい状況でした。直訳すればAACKは京都士山岳会のはずですが、創設以来、「京都大学士山岳会」を正式名称としています。今後は京都大学との連携を蜜にして、京都大学らしい知的貢献を担える人材の育成を、当会としても担っていきたいと思います。

来年2016年は、日本がマナスルに登頂してから60周年を迎えます。5月9日に初登頂したのは、会員の今西壽雄と、ギャルツェン・ノルブです。記念切手の発行をよく覚えています。また、国民の祝日として「山の日」が制定され、来年8月11日からいよいよ実施されます。山の日制定協議会の副会長として微力を尽くしてきましたが、

これをささやかに支援したいと思います。その一環として、去年は「雲南の山と自然」の写真展を松本市美術館と京大時計台で開催しました。今年は「ブータンの山と自然と文化」の写真展を11月から同様に実施します。そうした事業に協賛し、アーカイブ化した資料を活かすことを考えています。一言でいうと、年齢を重ねても「それなりに」、という貢献のしかたがあるのではないのでしょうか。玄冬という時代を生き抜いていく法人の姿を示して、就任のご挨拶といたします。今後とも、なにとぞよろしく申し上げます。

引用文献

- 伊谷原一・松沢哲郎・松林公蔵・山極壽一 (2008) フィールドワーク 60 年の伝統: 「子捨て」に始まり「山」を見つける. 『科学』 78(6): 635-642.
- 松沢哲郎 (2009) 霊長類学 60 年と今西錦司: 世界の霊長類学における日本の貢献. 『霊長類研究』 24: 187-196.

Summary

The Final Stage of AACK: The Hundred Years of Mountaineering in Kyoto University

Tetsuro Matsuzawa

Primate Research institute, Kyoto University

The year 2015 is the 100th year anniversary of mountaineering in Kyoto University. This article aims to summarize it and to review the bright side and the dark side as well. There were several successful pioneering works in the mountaineering, while there were many fatal accidents too. The 100 years history of AACK seems to be similar to the life cycle of an individual person. There might be the following four stages: the young days after the birth, adulthood, old age, and really old to the final end. In a sense, the Academic Alpine Club of Kyoto (AACK) has the longest history among the several mountaineering clubs in Kyoto University. AACK represents the history of mountaineering in the past 100 years. The mission of AACK in the near future may be summarized in the following three points. Firstly, there is a mission to make the archives of documents and photos and films on the activity of Kyoto University in the area of mountaineering. Secondly, AACK is expected to support the students' activity of Kyoto University Alpine Club (KUAC). Thirdly, AACK must find the new perspective in the area of academic activity. In this sense, there is a new attempt that my colleagues and me has been promoting. It is called the leading graduate program of Primatology and Wildlife Science to encourage the scientific activity based on the fieldwork.